

# 日本文化と禅

禅とわが国本来の詩歌

……………堀井 妙泉

織田有楽流「道具無し」

……………佐藤 妙珠

山と俳句（三） 劍岳回想

……………井本 光蓮

人間禅の書（一）

……………藤井 紹滴



# 禅とわが国本来の詩歌

堀井 妙泉

## 一 底荷としての誇り

「短歌は底荷である」と言ったのは、上田三四二という人であります。上田氏はその文学活動において、歌人、評論家、小説家として沢山の著書を出しておりますが、それぞれの部門において最高の賞を受賞している歌人であり、医師でもあります。

私は、短歌は勿論のことではありますが、俳句、川柳など諸外国にはない日本独自の短詩型文学を、日本文化の底荷と思っております。そして私の短歌の底荷となっているものは、禅の修行を続けてきたことであります。

「底荷」というのは、空荷の時の船舶が航海の安全をはかるために、船底に常時積み置かれた荷のことで、主に砂利が用いられていました。底荷の原語はバラストと言って「空の荷物」という意味だそうですが、イギリスの古語では「災禍」を意味し、荷厄介として利益だけを追求する商船にとっては、お金にならないお荷物以外の何ものでもないでしょうが、船の安全にはなくてはならないものであり、この底荷があるから船の転覆が免れているのであります。

現代の混乱している日本、心の荒廃している日本人、いまにも転覆しそうな日本丸であります。この日本丸を支え、少しでも立て直すことの出来るのは、古代インドの釈尊より、日本に脈々と受け継がれ歴代祖師がたの不惜身命財で護持されてきた、仏教の母体である禅の

精神文化であると思います。

また、上代からの万葉集、古今集、新古今集など、我が国の心と言葉の修練を積みやまない日本古来の詩歌、俳句などは、帆を張って走るといふような華やかさはありませんが、日本文学の底荷としての自覚を持っている限り、この国の将来はそう希望を失うものではないと思っております。

## 二 禅にたどりつくまで

いま、私の歩いて来た道を振り返ってみると、そのすべては短歌と禅の修行でありました。

短歌の方は途中、何度か中断しそうになりましたが、下手の横好きでなんとか続けてこられました。

小学校の頃、国語の時間に太田道灌という室町中期の武将の物語を聞きました。ある日、道灌が狩りに出かけて俄雨に会い、雨具を借りに一軒の朽ち果てた家の門前に立ち、大きな声で雨具を所望しましたが、家の中はひっそりとして、透かして見ると臍たけた女人が一人で、何やら書いている様子でした。暫くすると、小さな女童が出て来て、山吹の小枝を差し出し、その小枝には水茎のあとも美しく

七重八重花は咲けども山吹の実の一つだに  
無きぞ悲しき

という和歌が結ばれていました。

歌の意味は、見る通りの貧しさで、お貸しする蓑も笠もなく悲しい、まことに相済まないという思いと、山吹はこのように華やかに咲き乱れていても、実が成らないことに掛けて「実の一つだに」と詠まれたのです。

この和歌を読んだ道灌は、兵法に長じ、江戸城をはじめ、川越、岩槻の城を築いた武将でしたが、これが機縁となり、武だけでなく文学や和歌もたしなむようになり、後に『慕景集』という歌集も編んだほ

どであったそうです。

このようなお話を先生から聞き、和歌って何と素晴らしいものなんだろうと、涙が出る程感動したことを今も覚えています。子供ながらに見よう見真似で歌を作り始めました。時々『少女クラブ』という雑誌に投稿したりして、たまたま入選し、裁縫箱一式が送られて来たことも、嬉しい思い出であります。

昭和24年頃、小樽に「新墾」<sup>にひはり</sup>という短歌結社があり、私は主宰の小田観蛸という大変素晴らしい師にめぐり会うことができました。何年かご指導を頂いているうちに、自分の未熟さや非力を省みず、結社や地方のグループの皮相的な勉強会に飽き足らなくなり、悩むようになりました。

そんな折、革新的な前衛短歌を研究する歌人たちの会に誘われました。この会は結社の創作理念と違い、個人的感傷や、浅い自然詠を排し、戦中や敗戦後の人間の尊厳と、悲劇が追求される勉強会でした。今は亡き寺山修司、塚本邦雄、また現在活躍しておられる、岡井隆、佐々木幸綱、他の各氏を講師として勉強しました。北海道は文芸評論家の菱川善夫氏を中心に「北の会」、本州は「中の会」九州は「南の会」と集団が出来て、シンポジウムを開き、お互いに啓蒙し合って、古い確執を打ち破り、新しい短歌を打ち立てようと熱気の激しい会でした。会の運動が熱くなればなるほどに、それに参加して右往左往し、知識だけが膨らんでいく自分が何者なのか、何を拠り所として歌をつくるかわからなくなり、厚い壁に当たってしまいました。

それから暫く歌が出来ず鬱々と苦しんでいましたが、ある時ハッと気がつきました。新しさを追い求めるより、脚下にある真実を求め、万物のいのちと響き合う歌を詠みたいと思ったのです。それには、先ず何者にも煩わされない自己を確立することが先決でないか、作歌する上での拠り所は外に求めることでなく、心を磨くことだと思い、禅に入門することを決意いたしました。

歌の先輩たちから、禅などやると、煩惱妄想がなくなり、空っぽになって一生歌が出来なくなるよと、口々に言われましたが、固い決意は揺らぎませんでした。禅の修行をはじめた当時は、歯車がなかなか合わず、歌も出来ませんでした。修行が進むにつれてスムーズに出来るようになりました。

ある時、公案に詰まっていたときに、如々庵老師から「お主、歌を作っておるそうじゃが、どんな歌を作っているのか一つ聞かせてみよ」と言われ、咄嗟のことで躊躇していましたが、さあーさあーと促され、ようやく息を整えて

沈丁花の香りを運びくる風ゆえに公案一つ

もてあましをり

と吟上しました。

丁度、床の間に、老師が東京のご自宅より持参された沈丁花が活けてあり、残雪の多い北海道の道場にも早春の香りが漂っていました。

公案を持ってあましているなどと吟じたので、百雷が落ちるか、と、低頭していましたが、雷は落ちず、老師は何やらムニャムニャと仰せられたようでしたが、緊張のあまり耳に入りませんでした。

(平成20年5月1日、春季教団摂心会の法話より)

## 著者プロフィール



堀井妙泉（本名／美鶴）

昭和3年、函館市生まれ。歌人。新墾賞、北海道歌人会賞、北海道新聞短歌賞、日本歌人クラブ北海道ブロック賞受賞。平成2年より同人歌誌『英』編集発行人を務める。昭和44年、人間禅芳賀洞然老師に入門。現在、人間禅特任布教師。庵号／蓮昌庵。

# 織田有楽流「道具無し」

佐藤 妙珠

織田有楽流の流儀の中には「道具無し」という点前があります。

「道具無し」とはどのような点前だろうと思われる方が多いと思いますが、有楽流茶道にある点前の中の一つです。このような名前のつくお点前は、他の流派には見当たりません。

有楽流の流祖織田有楽斎は、武士として貴族的なお茶を自ら工夫され、ご家来やお付きの者に準備をさせていましたので、その中から自然と「道具無し」というお点前が生まれたのではないかと思います。

口伝には、

この点前<sup>てまえ</sup>、始終水指を道庫の内に入れ、必要あれば道庫の扉を一手に明け水汲み、一手で閉める。席に水指を飾らぬ故道具無しと云う。道庫内には、それぞれ茶巾・茶釜<sup>せん</sup>・水指・柄杓置き場所<sup>こぼし</sup>してあり、老師又は老人の為侍者は用意しておくなり。又、翻の水、道庫内に捨ててもよきよう戸外に樋通じある也。のち侍者始末しおくよう心掛けたし。

とあります。洗漕庵立田緑水様は、この口伝を今様の言葉で

この点前は、はじめから終わりまで水指を道具戸棚に入れておき、使う際に道具戸棚を片手にて開け、水を汲み片手にて道具戸棚を閉め、茶席には風炉の釜を置き水指を置かず、これを道具無しという。道具戸棚の中には、茶巾・茶筴・水指・柄杓を準備し置き場所を固定すべし。老師又は老人の為には、付き人が用意しておく。建水の水は道具戸棚の中に流しても良し。使った道具は、付き人が片付けおく。

と述べておられます。

この「道具無し」のお点前をするにあたっては、まず道庫の中に茶道具を準備しなければなりません。水指に水を入れ、お茶碗はすぐ<sup>た</sup>点てられるよう、茶巾・茶筴・茶杓を仕込みます。棗<sup>なつめ</sup>・柄



道庫の中の様子

杓・蓋置・水指もすべて道庫の棚に並べておき、道庫の戸を閉め、その後畳一畳の中央に風炉釜を置き湯を沸かします。お釜の湯が沸く頃から亭主は挨拶をして茶席に入り、道庫を開けて、お茶碗と棗を所定の位置に置きます。その後に柄杓と蓋置・水指を置き、道庫を閉め総礼をしてお茶を点てます。茶釜のお湯が沸きすぎた場合は、道庫を開け水指から水を汲みます。次に道庫を閉め、お客様にお茶を点てて差し上げます。お客様から抹茶碗が返った後に、道具類の片付けとなります。清めたお茶碗類と棗と柄杓・蓋置・翻すべてを道庫の中に納め戸を閉めます。亭主は茶室を出て茶道口で挨拶をし、お客様をお見送りした後、道庫の中の片付けに入ります。片付けは侍者が付き人がすることとなっていますが、普段の茶道稽古では稽古をした者が片付けることとなっています。

道庫は本部道場の隠寮にありましたが、改築された隠寮にも造られています。

織田有楽流指導者の会「洗心の集い」では、8月の一ヶ月間だけ道庫使用が許可されますので、その期間は集中的に稽古を行っています。

道具無しのお点前は日常の生活の中でもできますので、チャレンジしてみられてはいかがでしょうか。不意のお客様が来られてもお茶を



「道具無し」のお点前

お出しすることができ、立礼<sup>りゆうれい</sup>でお茶をお出しすることもできます。お茶を日常化をするために「道具無し」を試されてみるのもよいのではないかと思います。

準備としては、食器棚の前に小さな机を置き、お釜の代わりにポットを置きます。食器棚には、セットしたお茶碗と棗・水指・柄杓・蓋置を準備します。それに湯と水を捨てるための井を用意すれば、お点前ができます。食器棚に水指が入らない場合は、水指しの代わりにもう一つ井を利用されても結構だと思います。

この簡素な点前「道具無し」を織田有楽齋がどのような工夫により生み出されたのか、大いに興味があるところです。

合掌

## 著者プロフィール



佐藤妙珠（本名／米子）  
昭和20年、栃木県生まれ。千葉大学教育学部卒業。市川市で小学校教諭。昭和43年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、同教団輔教師。

## 山と俳句（三） 剣岳回想

井本 光蓮

いつも「十二時に使われて」いて、四国以外の山に登る機会は滅多にないが、山友達のMさんから、「足腰の立つうちに一度<sup>つるぎ</sup>剣へ登らないか」と誘われた。平成15年9月の初めだった。2人とも同年ですでに75歳になっていたので、この話に乗った。

剣岳は、槍・穂高などが登り尽くされた後も難攻不落で最後まで残った魔の山で、日本山岳会と参謀本部陸地測量部とが激しく初登頂を争っていたが、明治40年(1907年)7月、遂に測量官柴崎芳太郎一行によって登頂された。必死の努力にもかかわらず、早月尾根からも別山尾根からもルートを発見できなかった彼らは、最後に、剣沢の大雪渓を稜線まで登り、北側から岩壁を攀<sup>よ</sup>じて山頂に達した。ガイドは有名な宇治長次郎である。

ところが命がけで登った彼らは、山頂で錆びた錫杖の頭と剣身を発見する。前人未踏と信じられた山頂で、これを見た彼らの衝撃は如何ばかりであったろう。しかも、これらの法器は極めて古く、後に学者によって8世紀のものと鑑定され国の重文となった。千数百年も昔、不退転の勇気と鋼の意志をもってここ剣岳に登った修験僧がいた！ 彼(彼ら)の宗教的大歓喜は僕らの想像を遙かに絶したに違いない。一体どのルートで来たのか？ 単独か複数か？ 下山のルートは？ そして無事下山できたのか？ 一切は現在も謎のままである。

『日本靈異記』にも登場する修験道のカリスマ役小角<sup>えんのおづぬ</sup>は、7世紀に現れて葛城山・金峰山・大峰山などを開き、こうした修験の僧たちによって日本中の高山が次々に開かれてゆく。富士山・白山・立山・月



剣岳の奇峰

山・鳥海山・御嶽山・大山・石鎚山・阿蘇山等々々。

8世紀に男体山(2484m)を開いた勝道上人は「われもし山頂に至らざれば菩提に至らず」と誓願して、釈尊が雪山で苦行した例にならって雪の多い3月に登り、3度目に遂に登頂に成功した。この時の感動は、空海の『性霊集』に「一たびは喜び、一たびは悲しみ、心魂持し難し」と記されている。このように、高山の開祖にとっては登頂を成しとげることが同時に、見神であり見性であり誓願成就であった。こうした登山は疑いもなく、大自然を通して絶対者に出会うための命がけの行であり、同時に宗教的安心立命の手段であったと思われる。

剣岳の修験僧は、命がけの登頂の後果たしてどうなったのか？ 勝手な想像を許されるなら、彼はこの後、死力を振りしぼって自力で下山し、剣登頂のことは生涯誰にも語らなかつた、いやどんなに伝えようとしても、この宗教体験は他人には伝えられなかつたのではあるまいか。

さて、僕ら一行(リーダーのMさん、女性のFさんと僕ら夫婦の計4人)は9月2日早朝高知発、夕方室堂のみくりが池温泉に泊る。天

候悪く、眼前にあるはずの立山連峰は濃いガスで何も見えぬ。

3日朝から風雨の中を地獄谷から雷鳥坂を登る。下山してくる連中に聞くと、連日の激しい風雨のため剣登頂は出来ず、前剣まで登るのがやっとだと言う。別山乗越の剣御前小屋でしばらく冷えた体を休め、雪渓を渡って午後早く剣山荘に着く。明日の天候だけが気にかかる。

4日、4時起床したが外は大雨、出発をずらして6時に小屋を立つ。稜線に出て一服剣を越える頃から雨が止んで見る見るガスが切れはじめ、前剣が巨大な壁となって行手に立ちはだかる。ガレ場の続く路は登れば登る程急になり、空気がうすいのですぐに息が切れる。鎖を攀じて前剣(2813m)の頂に立てば、ようやく本峰がその雄姿を現した。それは余りにもでかい巖の塊だった。振り向けば眼下剣沢カールの向こうに、立山三山の大展望が広がる。

家内は右膝を痛めて、ここから先の岩場は足手まといになるといけないからここで待つと言う。この先どんな難所があるか知れぬので、用心して置いてゆくことにする。事実ここからは岩場・岩棚の登降と鎖場の連続だった。途中、男性とザイルを結んだ中年女性に出会ったが、「日本百名山を登っていて、今日の剣が最後の百山目なのでガイドさんを頼んで来ました」と嬉しそうに笑った。この寡黙なガイドとも親しくなり、周りの山の名前など教わりながら登る。

このルートが初登攀とうはんされたのは、大正2年3月宇治長次郎・佐伯平蔵をガイドとして、田部重治と小暮理太郎が登っている。田部によれば「長次郎が先に登って綱を下げる。3人共代わる代わるつかまって子供のように引っ張り上げられる。こんなことが2度、3度もあった」と記している。現在は、鎖やボルト・梯子はしご等で危険箇所は固められ、3点支持さえしっかり出来ればほとんど危険はない。ただし、1ヶ所だけ、垂直に近い岩場の鎖を攀じている途中で、上の人が動かなくなり、すぐ下にも人がいたので、ボルトの上に片脚で立ったまま待たされたことがあった。隣の鎖にFさんがいたので「大丈夫？」と声をか

けたら、気丈に「ええ、なんとか……」と笑顔を見せた。後で思うに、ここが上りの難所「カニノタテバイ」ではなかったか？ どうかこれを切り抜けて、僕ら3人は無事念願の剣山頂(2998m)に立った。僕らが登った後、山頂に国土地理院によって三角点が据えられ、現在は2999mと修正された(この様子はTVで放映されたので見られた方も多いと思う)。

天候は嘘のような快晴となり、山頂から立山の富士の折立越しに槍ヶ岳の針峰までが望まれた。須佐之男<sup>すさのおのみこと</sup>尊の祠の辺り、あの錫や剣が発見されたのはこの辺りかとガレ場を歩いてみたが、とても当時の有様を想像することは出来なかった。

この10日ばかり荒れた天候で、小屋に足止めされた登山者たちが一斉に登ったせい、9月の平日にもかかわらず祠の周りは、賑やかなさんざめきに溢れていた。岩に腰を下ろして遠く槍の穂を見つめながら、僕は千年前にこの絶頂を支配した怖ろしくも静謐<sup>せいひつ</sup>の時空を憶った。百年前もまだ、この静寂は流れていたに違いない。この厳肅な静けさが、今日の明るい山頂にはもうなかった。それだけが残念だった。



夕日の剣本峰

僕らは今日のうちに剣御前小屋まで着かねばならず、急いで記念の写真を撮り、名残を惜しみつつ山頂を後にした。

前剣で家内と合流。「待ちかねたろう？」と聞くと、目の前には剣本峰がどん坐っているし、ガスの切れ間から鋸のような八つ峰や源次郎尾根の眺め、それに立山越しに後立山連峰が雲の上に現れ、薬師や以前登った鹿島槍も見えて飽きることがなかったと話した。

4人はこの夜剣御前小屋に一泊。翌5日室堂に下山、みくりが池温泉でさっぱりと汗を流し、その日のうちに無事帰高した。

千数百年の伝統ある宗教的登山はすでに失われたが、僕らが山へ登りたくてたまらなくなるのは、大自然の懐に分け入って根源的な宇宙の命に回帰したいという願いの表れではなからうか。

剣岳で逢いたるオコジョ<sup>あ</sup>吾を怖れず  
鎖攀ず鼻先ミヤマダイモンジソウ  
大夕焼剣岳より生還す

(つづく)

#### 著者プロフィール



井本光蓮（本名 / 淳作）  
昭和3年、高知県生まれ。上原商店社長。昭和39年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅特任布教師。庵号 / 竜穩庵。

# 人間禅の書（一）

藤井 紹滴

「人間禅関係の人の書についてシリーズで書いてくれないか」との葆光庵丸川春潭老師の命を受け、自らの勉強も兼ね書くことになりました。かつて人間禅の如々庵芳賀洞然老師の書かれた『墨蹟大鑑』という、考察の深さと資料の正確さを誇る大著がありました。拙稿では及びもつきませんが、書そのものを別の切り口から記してみることにします。

書の鑑賞は大変難しく、どんな書が良いか、悪いかを考えるに、大別すれば、(一)整っていて良い書、(二)整っていないが良い書、(三)整っているが悪い書、(四)整っていないくて悪い書、となります。書は、その人の心がそのまま包み隠さず、良くも悪くも現われて全くごまかしのきかない不思議な世界です。同じ墨、同じ筆、同じ紙を用いても人により全く違った書が現れます。

良いとか悪いとかの判定は観る者の心が決めますが、いい字とは一見ただけでは分らなくても、見ているうちにだんだん良く見えてくるものです。反対に悪い字は、見ているとだんだん嫌になってくるものです。更に言えば、一般には書法にも叶い、素直で澄んだ線が良いのです。書は熟した技術のほかに、その人の学問、見識、人柄も加わってまいります。それらを葎した妙味を鑑賞することになります。

さて、この稿で第一回にとり上げるのは、初世総裁耕雲庵立田英山老大師の「如是」です。老大師の「如是」の中で、これは絶品です。全身の気合を一気に吐き出され、その迫力、筆力、線質とも全く圧倒

されます。全く他の追従を許さぬ書です。

細かく線を追ってみると、ただ突っ走るものでなく、気迫の中にどうにでも変化のできるゆとりと終始充実しきったものがある。始めの起筆から最後の終筆まで線をよく見て鑑賞していただきたい。どの部分をとってみても面白い。錬り上げた人の軌跡躍如たるものがある。

世に名品を評するに「天下第一」の語があるが、これはまさに「老大師第一」の作である。老大師の書の最高の名品である。老大師が人間禅に残された宝といつてよい。よく味わってほしいものである。こんな書に出会った日は、一日中ウキウキして得をした気持ちになります。

私が初めて谷中の擇木道場で長屋喜一先生に坐禅の手ほどきを受けた頃、老大師はまだまだご健在でございましたが、私にはご縁はありませんでした。後日老大師の提唱録を拝読し、驚嘆して磨瓢庵白田劫石老師の門に入った時には、既に帰寂された後でした。

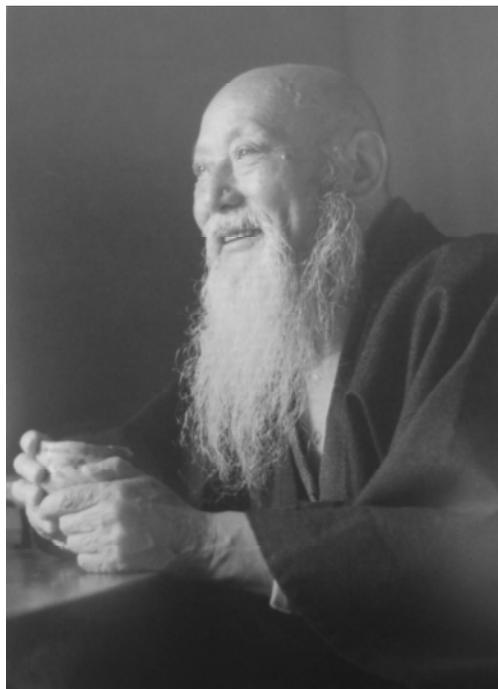
この書自体は雙峰庵山口夕靄老師のご所蔵であり、拝見したくお尋ねしたところ「鎮西支部担当を辞任するにあたり鎮西支部に寄託させてもらった……。『如是』については『人間形成と禅』の149頁（新装版125頁）にある「人間形成と人間禅」に宗旨が説かれておりますの



如是 英山

で参考にしてください」というお話がありました。

(つづく)



第一世総裁 耕雲庵立田英山老師

### 著者プロフィール

---



藤井紹滴（本名 / 頼次）

昭和15年東京生まれ。会社経営。金子清超先生から儒学、書を学ぶ。無窮会で儒学研究。研究にゆきづまり、昭和46年以来、長屋喜一先生から禅の指導を受ける。昭和61年、人間禅白田劫石老師に入門。